



「福島」を伝える

小野中学校3年 藤井万希子

練習試合の会場でふいに名前を呼ばれ、私は振り向いた。

「あっ、水俣の時の？」

「そう。びっくりだよ。ここで会うなんて」

偶然の再会に私たちは盛り上がった。

水俣の時。それは昨年十二月、福島県と熊本県水俣市との交流事業に参加した時のことだ。その事業には福島県内の中学生が四十人ほど参加した。なぜ東北と九州の県で交流が企画されたのかというと、二つの県には忘れることのできない被害を受けた共通点があるからだ。

私たち福島が今向き合っているのは、原子力発電所の事故による放射能汚染と風評被害。熊本では戦後に起きた公害、「水俣病」だ。事業の説明を聞くと、水俣病患者が出始めたころは正しい知識がなく、周りからたくさんの風評被害を受けたそうだ。今、福島の置かれている状況もかつての水俣と似ている。その悲劇をもう二度と繰り返さないように、私は身の引き締まる思いで交流事業に取り組んだ。

出発の一ヶ月前から事前研修が始まり、四十人と顔合わせをした。私は初対面の緊張で最初は遠慮がちだったが、少しずつ話をしていくうちに仲が深まっていくのを感じた。そして十二月、私たちは水俣市に向かった。海と緑に囲まれた自然あふれる街。肌に触れる風が暖かい。福島と九州の気候の違いに気がついた。しかしどことなく親近感を覚えたのは、豊かな自然が私たちのふるさとに似ていたためかもしれない。観光気分になっていた私は福島県の代表だということを思いだし、この四日間を充実させようと心に決めた。

事前学習で私たちは水俣病の経緯や被害状況について調べていた。しかし「百聞は一見に如かず」の意味を私はすぐに実感することになる。水俣病資料館で私たちは緒方さんと出会った。緒方さんは水俣病の患者さんで自分の体験を語

り部として伝えている人だ。彼の話から水俣病の苦しみ、そして病気を抱えながら生きるという決意がひしひしと私に伝わってきた。

水俣病は病気自体の苦しみ以上に、周囲からの「差別」が苦しかったそうだ。

「近づくな。うつる」

「水俣特有の奇病だ」

伝染しない病気であるのに、当時は十分な知識が無く様々な場面で差別を受けた。私たちの福島県も放射線量の高低に関わらず「被爆県」のレッテルを貼られ、観光や産業に大きな風評被害を受けている。目に見えない放射線を恐れ、いわれのない差別や農作物の不買につながっているのだ。

この二つの共通点は「知識不足」だ。正しい知識が伝われば、自分の固定観念にとらわれず正確な判断ができるはずだ。緒方さんから説明を聞き、私は水俣病に対する偏見が一切なくなった。そして私たちも、風評の払拭のためには「福島を正しく発信していくことが大切なのだ」という結論にたどり着いた。

緒方さんの一言が今でも忘れられない。

「『正直』に生きることが大切なんだよ」

「正直」という文字の、まっすぐな一画一画に緒方さんの人生が詰まっているように感じられた。緒方さんは初め誤解を受けることを恐れ、自分と家族の水俣病を隠していた。するとそれは逆に、差別という悪い結果をもたらした。私も震災の後、以前のように「福島県出身です」とはっきり言うことができなくなっていた。緒方さんの話でそんな自分に気づき、そして思った。

「何も隠さなくていい。そのままの私を、そのままの福島を伝えればいい」と。

この交流を通して、福島の現状と課題、そして未来が見えてきた。私たちは、福島について「正直」に語るができる。まっすぐに相手と向き合うことができる。それをこつこつ積み重ねていけば、希望に満ちた福島を創っていける。私はそう確信している。

(原文どおり)

